

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 4章7～15節>

1 (7-9) 土の器に過ぎない自分、しかし、そのことが自分の強み?!

7節の前半と後半の関係が面白いなと思わされます。私たちは普通、少しでも自分のことを良く強く見せたいと思うものですが、パウロは「わたしたちは、このような宝を土の器に納めています」と語り、自分のことを土で作った割れやすい素焼きの器と表現しています。なぜそんな風に言えるのでしょうか。その後、「この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために」、と続けて語ります。自分の中にある「宝」「力」の凄さがはっきり分かるためには自分は弱い方がいいのだと語っています。ここまで自分は弱くていいんだ、土の器でいいんだと思えるようになったら楽ですね。続けて語っている8-9節は、その時に確かに言える内容なのだと思います。では、問題の「宝」「力」とは何でしょうか？ それこそが、直前で語られている、神様がキリストによってなして下さった「福音」(4)なのです。

2 (10-13) 不吉な言葉「死」が「命」の意味を持つようになる。

続く10-13節も面白いですね。「福音」が分かって来たら初めて理解できるようになる「生と死」を巡る新しい捉え方が紹介されていると言えるでしょう。キリストの死が私たちに命をもたらした、そのことを真剣に考えるなら、死は不吉と決めつけるべきものではない、むしろ生、命を生むことにつながるものとパウロは考えるようになったのです。そのことから、「死につながるかもしれない」と不安がるしかなかったことも、むしろ命につなげて考えることができるようになった、つまりどんな時にもこの神様を見上げながら生きて行けるようになった、と言えるのではないのでしょうか。信仰を持って生きることによって与えられる恵みの一つだと思います(13節は、信仰者皆が持つ思いだという表現)。

3 (14-15) 「主イエスを復活させた神」の力は私たちにも働くもの。

「主イエスを復活させた神」(14)の力は、今日の箇所でもパウロが語ったような神の仕方、今を生きる私たちにも及ぶものであることも考えてお